小林正史先生のご退任にあたって

人間総合学部社会学科　俵　希實

小林正史先生は，本学に1990年に赴任され，今日までの33年間，本学でお働きになられました。短期大学時代は，教養科，教養学科，コミュニティ文化学科に，大学設置後は社会福祉学科と社会学科に所属され，本学に貢献されました。

小林先生のご専門は考古学で，特に，米国アリゾナ大学で身に付けられた研究法を用いて食文化史の復元，中でも和食の成立過程の解明に情熱を注いでこられ，近年は米品種交代仮説を提唱されておられます。その成果は多大で日本のみならず海外でも高く評価されています。昨今，大学教員の仕事は多岐にわたり，研究時間の確保が難しくなっていますが，先生は常に研究を優先され，定年までその姿勢を貫かれました。その姿勢に刺激を受けた教員も多くいると思います。夏休みや春休みなど長期休暇に入ると，東南アジアや南アジアの国々の村に出かけ，その地域の調理方法を観察したり，聞きとったりする民族調査に勤しまれていました。ご不在の間，先生にどうしても確認したいことが生じたことがあります。先生の滞在先のネット環境が整っていないことからメールで連絡を取ることができず，宿泊先に電話をかけたところ英語が通じず，最終的にファックスで連絡を取りました。以後，海外滞在中の先生と連絡をとる方法は私にとって重要課題となりました。

授業については，「文化人類学」「グローバル社会論」などをご担当され，豊富な知識と教養を学生に伝えてこられました。授業を拝聴したことがありますが，専門性が高くオリジナリティのある内容で知識欲が大いに満たされる授業でした。何より，ご自身の研究についてお話しされている先生はとても楽しそうで，聴いているだけで先生の研究への思いが伝わってきました。座学だけでなく，スス・コゲ観察を目的としてお米を炊くという実験も行っておられました。この実験は学生たちにとって記憶に残る体験のようで，学生たちからその時の様子を聞くことが度々ありました。専門科目のみならず，キャリア関連科目も多く担当されました。社会学科のキャリア関連科目は，企業や地方自治体の方々のご協力を得て進めていくため準備に時間を要します。先生は熱心に取り組まれ，企業や自治体の方々とも積極的にコミュニケーションをとられていました。

私は小林先生と11年間，社会学科で共に働いてまいりました。共同で担当した科目もあり，会話をすることが多くありました。その中で何度も笑ったり，驚いたりしたことを思い出します。先生は大変ユニークなお人柄で，接した誰もが先生のことを忘れないのではないかと思います。マイペースで，どのような時でもそれを崩されないので，時には周りが困ってしまうのですが，困りながらも「まあ，いいか」と思わせてしまう不思議な力をお持ちです。また，先生は自然と他人のよいところが目に入るようで，他人をネガティブに捉えることは絶対にされませんし，先生から他人に対するネガティブな評価を聞いたことがありません。親切で優しく，常に穏やかでいらっしゃいます。そして，先生は家族思いでもいらっしゃいます。先生との会話の中にはしばしばご家族が登場されます。一度，私の目の前で離れて暮らしているお子さんからの電話に出られたことがあったのですが，第一声が「おとうちゃんだよ」でした。とても暖かい声でいつも笑顔の先生がより一層笑顔だったことを思い出します。

長きにわたって本学でお働きになった存在感のある先生が去られるのは大変寂しいことです。今後は学外から本学，そして社会学科を応援していただけたら大変嬉しく思います。本学でのお働きに感謝しますとともに，先生のこれからの人生がさらに実り多きことを祈念いたします。

履歴・研究業績（2023. 3 現在）

氏　　名：小林　正史

所　　属：人間総合学部・社会学科

専門分野：考古学・文化人類学

研究・指導分野：考古学・文化人類学・食文化史

担当科目

＜本学において＞

「文化人類学」「石川の伝統文化」など

学会等における活動・役職歴

石川県考古学会・幹事、考古学研究会・全国委員、石川県埋蔵文化財センター評議員

学　歴（大学入学時より記載）

1976年４月　東北大学文学部入学
1980年３月　　同　　卒業
1980年４月　東北大学文学研究科（歴史学）・前期課程入学
1982年４月　　同　　後期課程へ進学
1983年７月　　同　　休学
　　アリゾナ大学大学院・人類学科に入学
1986年５月　アリゾナ大学人類学科で修士号を得る
1986年10月　東北大学文学研究科に復学（アリゾナ大学は休学）
1988年９月　東北大学文学研究科・後期課程を単位修了・退学
　　アリゾナ大学人類学科に復学
1990年４月　北陸学院短期大学に就職（アリゾナ大学は単位取得を修了）、現在に至る
1996年５月　アリゾナ大学博士課程を修了
最終学歴　　アリゾナ大学人類学科大学院博士課程修了

学位

文学学士（考古学）	東北大学文学部1980年
文学修士（国史学）	東北大学文学研究科1982年
人類学修士	アリゾナ大学人類学科1986年
人類学博士	アリゾナ大学人類学科1996年

博士学位論文名

An Ethnoarchaeological Study of the Relationships Between Vessel Form and Function.

職　歴

1990年４月　北陸学院短期大学・教養科・助教授（～1999年３月）
1999年４月～　教養学科（2005年４月よりコミュニティ文化学科に改編）教授
2008年４月～　社会福祉学科教授
2012年４月～　社会学科教授

業　績

著　書

小林正史（共著）2022年３月「つっかえ棒支脚の使い方」『モノ・コト・コトバの人類史―総合人類学の探究―』pp. 83-110, 雄山閣.

小林正史・久保田慎二（共著）2020年12月「良渚文化の蒸し調理の特性」『河姆渡と良渚：中国稲作文明の起源』pp. 123-134, 雄山閣.

小林正史　2018年５月（共著）「炊飯方法の研究」『やきもの』pp. 260-274、近代文藝社.

小林正史（編著；北野博司・木立雅朗・望月精司・宇野隆夫）2017年10月　「鍋の形・作りの変化」「食器」「使い方との関連から見た土器の製作技術」、『モノと技術の古代史　陶芸編』pp. 9-95、157-206、吉川弘文館.

小林正史　2017年６月（共著）「弥生・古墳時代深鍋にみる炊飯用とオカズ用の分化」『理論考古学の実践Ⅱ』pp. 381-410、同成社.

小林正史（共著）2016年３月「鍋のススコゲから見た縄文・弥生時代の囲炉裏構造」『縄文時代の食と住まい』79-130頁、同成社.

小林正史（共著）2015年３月「縄文と弥生の食」『北陸から見た日本史』27-40頁、洋泉社.

北野博司・小林正史（共著）2012年３月「北日本における古代の土鍋調理」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』259-285頁、東北芸術工科大学.

小林正史（共著）2011年11月「伊東信雄と東北弥生文化研究」『弥生時代の考古学・第９巻』41-58頁、同成社.

小林正史（共著）2009年３月「弥生土器の技術―深鍋のつくり分けと使い分け―」『弥生文化の研究』６巻15-30頁、同成社.

小林正史（共著）2009年５月「東北地方の弥生深鍋のつくり分けと使い分け」『新潟県考古学会20周年記念論集』305-334頁、新潟県考古学会.

小林正史（共著）2008年８月「スス・コゲからみた土器使用法」『縄文時代の考古学』７巻143-156頁、同成社.

小林正史（共著）2008年６月「黒斑からみた縄文土器の野焼き方法」『縄文土器総覧』950-955頁、アムプロモーション.

小林正史（共著）2008年６月「縄文土器のスス・コゲ」『縄文土器総覧』1015-1020頁、アムプロモーション.

小林正史（共著）2008年３月「古墳時代後期から古代の米蒸し調理」『芹沢長介先生追悼　考古・民族・歴史学論集』449-472頁、六一書房.

小林正史（共著）2007年７月「稲作農耕民の覆い型野焼きの基本特徴とバリエーション」『土器の民族考古学』後藤明編63-79頁、同成社.

小林正史（共著）2007年３月「形成過程にもとづく黒斑の類型化（韓国語）」、『土器焼成の考古学』115-126頁.

小林正史（共著）2007年３月「弥生早期（夜臼式）土器の野焼き方法」、大手前大学史学研究所編『土器研究の新視点』203-228頁、六一書房.

小林正史（共著）2006年10月「土器文様はなぜ変わるか：多面的アプローチの重要性」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅣ　―土器形式をめぐる諸問題―』101-119頁、早稲田大学先史考古学研究所.

小林正史（共著）2006年４月「プロセス考古学からの提言」小杉康編『心と形の考古学』33-42頁、同成社.

小林正史（共著）2006年４月「土器文様はなぜ変

わるか」小杉康編『心と形の考古学』161-190頁、同成社.

小林正史（共著）2005年12月「バングラデシュ西部の伝統的土器つくりにおける成形手法の選択」『世界の土器作り』27-60頁、同成社.

小林正史（共著）2004年５月「岩野原遺跡の煮炊き用土器の使用痕」『火炎土器の研究』236-242頁、新潟県歴史博物館編、同成社.

小林正史（共著）2003年５月「東南アジアの土器作り民族誌における工程間の結びつき」『立命館大学考古学論集Ⅲ』1043-1066頁、立命館大学.

小林正史（共著）2000年５月「カリンガ土器の変化プロセス」『交流の考古学』134-179頁、朝倉書店.

小林正史（共著）2000年１月「土器文様にみられる地域色の動態を生み出すプロセス」『佐藤広史君追悼論文集　一所懸命』181-199頁、今野印刷.

小林正史（共著）1999年５月「ポイント・カウンティング法による土器胎土の粒度組成の分析」『北陸の考古学Ⅲ』73-96頁、石川県考古学研究会.

小林正史（共著）1999年10月「煮炊き用土器の作り分けと使い分け―道具としての土器の分析―」『食の復元２』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集２、1-59頁、帝京大学山梨文化財研究所.

小林正史（共著）1998年３月「野焼き方法の変化を生み出した要因―民族誌の野焼き方法の分析―」『民族考古学序説』139-159頁、民族考古学研究会編、同成社.

Kobayashi, Masashi 1996年６月 *An Ethnoarchaeological Study of the Relationships between Vessel Form and Function*、UMI, Ann Arbor.

Kobayashi, Masashi（共著） 1994年５月 Use-alteration analysis of Kalinga pottery. *Kalinga Ethnoarchaeology*、127-168頁、Smithsonian Press.

小林正史（共著）1993年４月「民族考古学からみた土器の用途推定」『新視点・日本の歴史１』132-139頁、新人物往来社.

研究論文（＃：査読あり）

小林正史・村上由美子　2023年３月「籾の貯蔵・脱穀・脱稃方法にみられる穂摘み頴稲と高刈り稲穀の間の違い：東南アジアの文化間比較に基づく民族誌モデルの提示」『東南アジア考古学』42：41-58, ＃.

小林正史　2023年３月「弥生時代から中・近世への玄米度（精米度）の変化」『石川考古学研究会会誌』66.

小林正史・外山政子・原田幹　2023年３月「ススコゲからみた朝日遺跡の深鍋による調理方法の時間的変化」『あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要』２：１-21.

小林正史　2023年３月「弥生時代から中世への主食調理方法の変化とその背景としての米品種交替仮説」『北陸学院大学研究紀要』15：57-80.

小林正史・村上由美子　2022年12月「穂摘みの選択理由についての民族誌モデル」『人類誌集報』16：81-90.

小林正史　2022年５月「小特集　湯取り法炊飯から米蒸しへの転換過程（その２）の趣旨説明」『物質文化』102：73-74, ＃.

小林正史・岩橋孝典・佐々木仁志　2022年５月「山陰におけるウルチ米蒸しの方法―ススコゲ分析から―」『物質文化』102：75-96, ＃.

小林正史・妹尾裕介　2022年３月「ススコゲからみた宮都の小鍋の使い方」『石川考古学研究会会誌』65：37-53.

小林正史・妹尾裕介　2022年３月「６～８世紀の主食調理法：ウルチ米蒸し調理と小鍋による湯取り法炊飯の組合せにみられる地域差」『新潟考古』33：123-142.

小林正史　2022年３月「東南アジアと日本の民族誌におけるイロリ構造の比較」『北陸学院大学研究紀要』14：73-94.

小林正史　2022年３月「稲作農耕民の民族誌における火処タイプの選択理由」『東南アジア考古学』41：41-56,　＃.

小林正史　2021年５月「総論　湯取り法炊飯から米蒸し調理への転換過程」『物質文化』101：1-8,　＃.

小林正史・久保田慎二　2021年５月「東南アジア大陸部におけるウルチ米を蒸す調理の民族誌」、『物質文化』101：9-32.　＃.

妹尾裕介・長友朋子・小林正史　2021年５月「近畿地方における造り付け竈導入期の米蒸し調理の選択的受容」『物質文化』101：33-50.　＃.

小林正史　2021年12月「ススコゲからみた唐古・鍵遺跡の深鍋によるオカズ調理方法」『人類誌集報』15：106-119.

小林正史　2021年３月「中世煮炊き具にみられる地域差と時間的変化の背景」『石川考古学研究会会誌』64：33-50.

小林正史　2021年３月「炊飯民族誌の比較分析」『北陸学院大学研究紀要』13：105-124.

小林正史　2020「山陰における湯取り法炊飯から米蒸し調理への転換過程―山陰では造り付けカマドを受け入れなかった理由―」『物質文化』100：105-124.　＃.

小林正史・久保田慎二・小野本敦　2020「湯取り法炊飯から米蒸し調理への転換過程」『新潟考古』31：79-98.

小林正史　2020年３月「ウルチ米を蒸す調理の民族誌比較：ジャワの二度蒸し法を中心に」『北陸学院大学研究紀要』12：31-56.

小林正史　2019年10月「弥生時代から古墳前期への湯取り法炊飯の変化」『古代』145：117-185.　＃.

小林正史　2019年５月「北タイ・カレン族の伝統的米調理方法」『物質文化』99：75-96、＃査読あり.

小林正史　2019年３月「縄文深鍋による調理方法とサイズ間の使い分け」『新潟考古』30：17-36.

小林正史　2019年３月「加賀における弥生から古墳への炊飯方法の変化：沖町遺跡のスス・コゲ分析を中心として」『石川県考古学研究会会誌』62：19-36.

小林正史・久保田慎二・陳維鈞　2018年11月「スス・コゲからみた台湾北部の新石器時代～中近世の炊飯方法」『東南アジア考古学会誌』38：23-40.　＃.

小林正史　2018年５月「竈構造の時間的変化と地域差についての定量的分析」『物質文化』98：99-119.　＃.

小林正史　2018年５月「古墳時代・古代の米蒸し調理」『物質文化』98：1-19,　＃.

小林正史・滝沢規朗　2018年５月「スス・コゲからみた東北地方（阿賀北以北）の弥生・古墳深鍋による炊飯方法」『新潟考古』29：39-58.

小林正史　2018年３月「ラオス・オイ族における米品種の早晩性、粘り気度、水田の水量の関連」『北陸学院大学研究紀要』10号41-58.

小林正史・外山政子　2017年２月「ラオス・オイ族における伝統的米品種の粘り気度の変化要因」

『石川県考古学研究会会誌』60：15-36.

小林正史　2016年10月「東北地方における縄文深鍋から弥生深鍋への調理方法の変化：東北日本の遠賀川系深鍋による炊飯方法の特徴」『日本考古学協会2016年度弘前大会・第１分科会　研究報告資料集』pp. 111-151.

小林正史・外山政子・北野博司　2016年５月「ラオス・アタプー県オイ族の伝統的米作りの変容過程」『物質文化』96：71-88.　#.

小林正史　2016年３月「基礎研究としての炊飯民族誌の比較分析」『考古学ジャーナル』682号10-14頁.

小林正史　2016年３月「総論：土器使用痕分析の目的と方法」『考古学ジャーナル』682号３・４頁.

小林正史・外山政子・北野博司　2016年３月「ラオス・アタプー県オイ族の伝統的米作り」『北陸学院大学研究紀要』８号159-184頁.

小林正史・外山政子　2016年３月「東西日本間の竈の地域差を生み出した背景」『石川県考古学研究会会誌』59号57-74頁.

小林正史　2015年３月「弥生・古墳時代の食器の使い分け」『石川県考古学研究会会誌』58号27-50頁.

小林正史　2015年３月「弥生土器の壷の使い方」『新潟考古』26号37-56頁、新潟県考古学会.

小林正史　2015年３月「ラオス・アタプー県のオイ族の伝統的食文化」『北陸学院大学研究紀要』７号131-156頁.

小林正史　2015年３月「縄文土器の紐積み方法」『三内丸山遺跡年報』18号57-95頁、青森県教育委員会.

小林正史　2014年６月「ススコゲ観察による弥生・古墳時代の炊飯方法と米タイプの復元―米品種交代仮説の提唱」『古代文化』66（１）17-38頁、#.

小林正史　2014年11月「炊飯方法の変遷」『キューピーニュース』492号1-19頁.

小林正史　2014年３月「古墳後期から古代の米蒸し調理における東・西日本間の違い」『新潟考古』25号47-66頁、新潟県考古学会.

小林正史　2014年９月「土鍋が壊れる理由とその対策」『石川考古』321号4-8頁、石川県考古学研究会.

小林正史　2014年３月「東南アジア大陸部の覆い型野焼き民族誌の地域差の背景」『アジアの土と炎―民族誌と実験考古学の最前線』40-47頁、「東アジアの歴史と文化」懇話会.

小林正史　2014年10月「カリンガ土器の使用痕分析の補足説明」ハングル語『漢江考古』10号230-243頁、漢江考古学研究所.

小林正史・外山政子・W.　Sirisena　2014年３月「スリランカ・キャンディ地域の伝統的炊飯方法」『北陸学院大学研究紀要』６号117-140頁.

小林正史　2013年３月「炊飯民族誌の比較分析からみたスリランカの伝統的炊飯の特徴」『北陸学院大学研究紀要』５号127-152頁.

小林正史　2013年３月「ススコゲからみた田中B遺跡の古墳中期深鍋による炊飯方法」『石川県考古学研究会会誌』56号39-58頁.

小林正史　2013年３月「鍋蓋の役割と深鍋の口縁部の形の結び付き」『石川考古』314号6-7頁、石川県考古学研究会.

小林正史　2012年３月「民族誌の比較分析からみた伝統的炊飯の基本特徴とバリエーション」『北陸学院大学研究紀要』４号129-150頁.

小林正史・滝沢規朗・古澤妥史　2012年３月「ススコゲからみた縄文深鍋のオキ火利用」『新潟考古』23号99-116頁、新潟県考古学会.

小林正史　2011年「縄文・弥生時代の煮炊き用土器を深鍋と呼ぼう」『古代学研究』192号29-39頁.＃.

小林正史・金箱文夫　2011年３月「赤山陣屋跡遺跡のナッツ類加工場から出土した縄文晩期深鍋の使い方」『北陸学院大学紀要』３号143-158頁.

小林正史　2011年４月「ススコゲからみた南新保遺跡の月影式深鍋の使い分け」『石川県考古学会会誌』54号31-56頁.

小林正史・福海貴子　2010年３月「スス・コゲからみた八日市地方遺跡の弥生中期深鍋による調理方法」『石川県考古学会会誌』53号、39-61頁.

小林正史・赤松佳奈・向井妙　2010年３月「弥生時代の炊飯方法の復元：山賀遺跡の弥生前・中期深鍋のスス・コゲ分析をもとに」『北陸学院大学紀要』２号15-30頁.

小林正史　2009年３月「蒸し調理が導入される背景：東北タイと北タイの調理民族誌の比較をもとに」『石川県考古学会会誌』52号65-100頁.

小林正史　2009年５月「ススとコゲからみた東北地方の弥生深鍋の使い方『新潟考古』20号3-33頁、新潟県考古学会.

小林正史・阿部昭典　2008年５月「縄文深鍋のスス・コゲからみた調理方法：胴下部コゲの形成過程を中心に」『新潟考古』39号1-40頁、新潟県考古学会.

小林正史・徳澤啓一・長友朋子・北野博司　2007年12月「稲作農耕民の伝統的土器作りにおける技術と生産様式の結びつき」『北陸学院短期大学紀要』39号277-328頁.

小林正史　2007年３月「スス・コゲからみた炊飯用鍋とオカズ用鍋の識別：カリンガ土器の使用痕分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』137号267-304頁、国立歴史民俗博物館、＃.

小林正史・徳澤啓一・長友朋子・北野博司　2007年12月「北タイと東北タイの土器生産様式の違いを生み出した背景」『北陸学院短期大学紀要』39号219-276頁.

小林正史　2006年12月「北陸の弥生深鍋の作り分けと使い分け『古代文化』58（３）71-85頁、＃.

小林正史・谷正和　2005年12月「バングラデシュ西部における炊飯方法とパーボイル方法の関連」『北陸学院短期大学紀要』37号183-206頁.

小林正史　2005年５月「稲作農耕民の土器作り民族誌の分析からみた弥生土鍋の作り分け」『考古学ジャーナル』529号15-20頁.

小林正史　2004年12月「稲作農耕民の伝統的土器作りにおける覆い型野焼きの特徴」『北陸学院短期大学紀要』36号203-228頁.

小林正史　2004年１月「米飯とオカズという調理の分化のはじまり」『食の科学』311号10-19頁、光琳.

小林正史・谷正和　2003年12月「南アジアにおける米のパーボイル加工：炊飯方法や米品種との関連を中心に」『北陸学院短期大学紀要』35号177-194頁.

小林正史　2003年10月「黒斑からみた加賀の弥生土器の野焼き方法」『北陸古代土器研究』10号79-108頁.

小林正史　2003年３月「使用痕跡からみた縄文・弥生土器による調理方法」、『石川県考古学研究会会誌』46号67-96頁.

小林正史・久世建二・北野博司　2003年10月「黒

斑からみた弥生土器の覆い型野焼きの特徴」『日本考古学』16号45-69頁、日本考古学協会、#.

小林正史・柳瀬昭彦　2002年５月「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』13号19-47頁、日本考古学協会、#.

小林正史・谷正和　2002年12月「南アジアにおける米の加工、調理、食べ方の関連：バングラデシュ西部の調査例から」『北陸学院短期大学紀要』34号153-178頁.

小林正史　2002年11月「素焼き土器　―野焼き方法を例として―」『季刊考古学』81号37-41頁.

小林正史・坂井良輔・藤田邦雄　2002年10月「脂質組成からみた中世から近世への灯明油の変化」『人類史研究』13号19-39頁、人類史研究会.

小林正史　2001年12月「煮炊き用土器のコゲとススからみた弥生時代の米の調理方法　―中在家南遺跡を中心に―」『北陸学院短期大学紀要』33号153-178頁.

小林正史　2001年５月「弥生土器のタタキ技法―タタキによる原型の変形度を中心に―」『北陸古代土器研究』９号93-118頁、北陸古代土器研究会.

小林正史・柳瀬昭彦　2000年11月「弥生時代の米の調理方法」『考古学ジャーナル』453号14-18頁、454号20-24頁.

小林正史・久世建二・北野博司・小島俊彰　2000年３月「北部九州における縄文・弥生土器の野焼き方法の変化」『青丘学術論集』第17集1-134頁、韓国文化研究振興財団.

久世建二・小島俊彰・北野博司・小林正史　1999年10月「黒斑からみた縄文土器の野焼き方法」（文責は小林）『日本考古学』８号19-49頁、日本考古学協会、#.

小林正史　1999年５月「土器文様の受け入れプロセスについて―縄文晩期工字文の伝播を例として―」『北越考古学』10号20～34頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1999年３月「須恵器瓶・壷の形と大きさによる作り分け」『北陸古代土器研究』８号109-128頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1998年12月「フィリピン・カリンガ族の人口動態」『北陸学院短期大学紀要』30号255-281頁.

小林正史　1997年12月「弥生時代から古代の農民は米をどれだけ食べたか」『北陸学院短期大学紀要』28号161-179頁.

小林正史　1997年10月「先史時代・古代における土器による煮炊き方法」『月刊文化財』10号39-45頁、文化庁.

久世建二・小島俊彰・北野博司・小林正史（共著、分析は小林）1997年10月「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」『日本考古学』４号41-90頁、日本考古学協会、#.

小林正史　1997年３月「弥生時代から古墳初期の甕の作り分け」『北陸古代土器研究』６号106-132頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1997年３月「炭化物からみた弥生時代の甕の使い分け」『北陸古代土器研究』７号109-129頁、北陸古代土器研究会.

坂井良輔・小林正史　1995年11月「脂肪酸分析の方法と問題点」『考古学ジャーナル』386号9-16頁.

小林正史　1995年10月「縄文から弥生への煮沸用土器の大きさの変化」『北陸古代土器研究』５号110-130頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1994年９月「稲作農耕民とトウモロコシ農耕民の煮沸用土器―民族考古学による通文化比較」『北陸古代土器研究』４号85-110頁、北陸

古代土器研究会.

小林正史　1993年11月「稲作文化圏の伝統的土器作り技術」『古代文化』45（11）27-50頁、古代學協会、#.

小林正史　1993年５月「カリンガ土器の製作技術」『北陸古代土器研究』３号74-103頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1992年５月「煮沸実験に基づく先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』２号80-100頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1992年５月「器種組成からみた縄文土器から弥生土器への変化」『北越考古学』５号1-34頁、北越考古学研究会.

小林正史　1991年６月「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』１号15-30頁、北陸古代土器研究会.

小林正史　1991年５月「縄文時代終末期における東北地方中・南部間の地域差」『北越考古学』４号23-50頁、北越考古学研究会.

小林正史　1989年５月「先史時代土器の器種分類について」『北越考古学』２号1-24頁、北越考古学研究会.

Longacre, W. A., K. Kvamme, M. Kobayashi 1988年５月 Southwestern Pottery Standardization: An Ethnoarchaeological View From the Philippines. *The Kiva* 53（２）101-112頁、アリゾナ州立博物館、#.

調査報告書など

小林正史　2012年７月「仙台平野の弥生深鍋による炊飯方法と土器つくり技術」『発掘富沢』52-57頁、仙台市地底の森ミュージアム.

小林正史編（共著）2011年４月『土器使用痕研究』平成19・20年度科学研究費補助金・研究成果報告書、北陸学院大学.

小林正史編集（共著）2006年３月『黒斑からみた縄文・弥生土器・土師器の野焼き方法』平成16・17年度科学研究費補助金・研究成果報告書、北陸学院大学.

小林正史　2004年３月「ススとコゲからみた北中条遺跡の煮炊き用土器の使い方」『津幡町北中条遺跡（E区）』269-282頁、津幡町教育委員会.

小林正史・坂井良輔（共著）2001年３月「一乗谷朝倉氏遺跡の灯明皿の脂質分析」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2000』22-30頁、一乗谷朝倉資料館.

小林正史・有馬未希（共著）2001年３月「食文化」『バングラデシュ・ベンガル地方の地下水砒素汚染問題に関する応用人類学的研究』63-107頁、編集谷正和、宮崎国際大学、科研成果報告書.

小林正史　2001年３月「沖縄離島地域の天水利用」『バングラデシュ・ベンガル地方の地下水砒素汚染問題に関する応用人類学的研究』193-202頁、編集谷正和、宮崎国際大学、科研成果報告書.

小林正史　2000年３月「縄文時代前・中期の煮炊き用土器の作り分け」『史跡三内丸山遺跡年報３』73-81頁、青森県教育委員会.

小林正史　2000年３月「黒斑からみた長野地域の弥生土器の野焼き方法」『松原遺跡弥生・総論７弥生時代・考察』25-66頁、長野県埋蔵文化財センター.

小林正史　2000年３月「弥生時代の煮炊き用土器の作り分けと使い分け―長野地域を中心として―」『松原遺跡　弥生・総論３　弥生中期・土器本文』183-225頁、長野県埋蔵文化財センター.

小林正史　1998年８月「凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較」『一色青海遺跡（自然科学・考察編）』131-156頁、愛知県埋蔵文化財センター.

小林正史　1998年３月「土器の文様はなぜ変わるか―東北地方の縄文晩期後半の単位文様を例として―」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』47-91頁、氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会編.

小林正史・谷正和（共著）1998年３月「ロングエーカーの民族考古学的研究」『民族考古学序説』民族考古学研究会編45-54頁、同成社.

小林正史・坂井良輔・藤田邦雄（共著）1996年３月「灯明皿の脂質分析」（文責は小林）『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）第二分冊』24-37頁、富山県文化振興財団.

坂井良輔・小林正史（共著）1995年３月「炭化物と脂肪酸からみた高田馬場三丁目遺跡の甕の使い方」『高田馬場三丁目遺跡』187-219頁、新宿区教育委員会.

小林正史・坂井良輔（共著）1995年３月「土師器の脂肪酸分析」『上落合二丁目遺跡』（文責は小林）150-171頁、新宿区上落合二丁目遺跡調査団.

小林正史　1994年３月「弥生時代の甕の器形と制作技術による作り分け：戸水B遺跡を中心として」『戸水B遺跡』114-151頁、石川県立埋蔵文化財センター.

小林正史　1993年３月「野本遺跡の甕の使用痕分析」『野本遺跡』91-130頁、石川県立埋蔵文化財センター.

小林正史　1992年３月「中相川遺跡の甕の炭化物分析」『相川遺跡群』125-162頁、石川県立埋文センター.

小林正史　1988年３月「新潟県山北町上山遺跡出土の縄文時代終末期の土器」『北越考古学』１号35-45頁、北越考古学研究会.

小林正史　1987年５月「1986年の動向：北アメリカ」『考古学ジャーナル』277号153-166頁.

研究発表（発表要旨集）

Masashi Kobayashi、Shinji Kubota Cross-cultural comparison of normal rice 粳米 steaming ethnographies: For better understanding of the Liangzhu Culture rice steaming. NINTH WORLDWIDE CONFERENCE OF THE SOCIETY FOR EAST ASIAN ARCHAEOLOGY. Session: Integrating archaeology and arch. science to better understand the origins of Chinese civilization、20220703、Daegu, South Korea. (OnLine)

小林正史　20220605「弥生時代～古代の玄米度（精米度）」日本文化人類学会第56回研究大会、明治大学（オンライン発表）.

小林正史　2022年５月28・29日「ススコゲから見た藤原宮・平城宮の小鍋の使い方」『日本考古学協会第88回総会研究発表要旨』pp. 97、早稲田大学（オンライン発表）.

小林正史　2022年４月「穂首刈りから高刈り・根刈りへの転換に伴うコメ貯蔵方法の変化」考古学研究会ポスター発表、岡山大学（オンライン発表）.

小林正史・岩橋孝典・佐々木仁志　2021「山陰におけるウルチ米蒸し調理の方法―ススコゲ分析から―」『日本考古学協会第87回総会研究発表要旨』p. 87、2021年５月、専修大学.

小林正史・妹尾裕介・加藤雅士　2021「古墳時代後期から古代（６～８世紀）の近畿地方における米蒸調理の重要性」岡山考古学研究会第67回総会・研究集会（オンラインポスター発表）20210424.

小林正史　2020「ウルチ米を蒸す調理の基本特徴とバリエーション：北タイ・ミャンマー山地民とジャワ地域の比較」日本文化人類学会第54回研究大会（オンライン）.

小林正史・村上由美子・佐伯純也　2020「古代山陰における二股型支脚と移動式カマドによる米蒸し方法：湯取り法炊飯に使われた古墳初頭の支脚との使い方の違い」岡山考古学研究会総会ポス

ター（オンライン）発表20200718.

小林正史・久保田慎二　2020「ウルチ米を蒸す調理の民族誌比較」『日本考古学協会第86回総会発表要旨』pp. 104-105、2020年６月.

小林正史、藤田三郎、佐々木仁志　2021「奈良盆地の弥生・古墳時代の煮炊き用土器の形態属性の時間的変化」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨』pp. 246-247.

小林正史、藤田三郎、久保田慎二、松永篤知、外山政子、佐々木仁志「弥生前期から古墳前期への湯取り法炊飯の変化：唐古・鍵遺跡の深鍋のスス・コゲ分析」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨』pp. 76-77.

小林正史・外山政子・松永篤知　2019「３Dスキャナを用いた上東遺跡井戸Pト出土深鍋のススコゲ分析」『日本文化財科学会第36回大会研究発表要旨集』pp. 216-217、2019年６月２日、東京藝術大学.

小林正史・外山政子　2019「東日本の弥生・古墳時代の台付き深鍋の選択理由」考古学研究会第65回総会・研究集会、2019年４月20・21日、岡山大学.

小林正史「東南アジア・南アジア民族誌における粥調理」日本文化人類学会第53回研究大会、2019年６月１日、東北大学.

小林正史「弥生・古墳時代のススコゲの付く壺による調理方法」『日本考古学協会第85回総会発表要旨』pp. 222-223、2019年５月19日、駒澤大学.

小林正史・久保田慎二・中村慎一・孫国平・王永磊　2018 Reasons for changes in rice cooking method in Long River areas and Korea/Japan. SEAA 8th Meeting at 南京大学20180610.

小林正史　2018年５月「米調理時間の短縮化を生み出した要因についての民族誌モデル」『日本考古学協会第84回総会発表要旨』pp. 146-147. 20170527、明治大学.

小林正史・久保田慎二・陳維鈞　2018「土鍋のスス・コゲからみた台湾北部の新石器時代～中近世の炊飯方法」『日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集』pp. 42-43、於奈良女子大学、20180706-07.

小林正史　2018「稲作農耕民の火処の選択要因についての民族誌モデル」考古学研究会第64回総会・研究集会、岡山大学20180421-22.

小林正史　2017年５月「弥生時代～古代の米飯の食べ方の変化」『日本考古学協会第83回総会発表要旨』pp. 174-175.　20170528、大正大学.

小林正史　2017年６月「復元土器の水平割口の出現頻度による粘土紐接着強度の定量化」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』pp. 86-87、於東北芸術工科大学、20170610-11.

小林正史　2017年４月「和食の成立過程：古代における飯用食器とオカズ・汁用食器の作り分け」考古学研究会第63回総会・研究集会、20170416於岡山大学.

小林正史「東北地方における縄文深鍋から弥生深鍋への調理方法の変化：東北日本の遠賀川系深鍋による炊飯方法の特徴」2016年10月16日『日本考古学協会2016年度大会・研究発表要旨集』pp. 24-25.

KOBAYASHI Masashi 小林正史、Shinji KUBOTA 久保田慎二、GouPing SUN 孫国平、YongLeiWANG 王永磊　共著Cooking pottery use-wear analysis to reconstruct rice cooking methods of early rice farmers in Japan and Middle China. 2016 June, 8-12、東アジア考古学会SEAA 7th meeting at Boston.

小林正史「弥生・古墳時代（相当期）の鍋釜からみた西日本と韓半島の間の調理方法の違い」2016年４月、考古学研究会第62回総会・研究集会、

20160417　於岡山大学.

小林正史「東北地方の初期水田稲作研究の進展」2016年４月24日 Anthropology of Japan in Japan研究大会、於東北大学川内キャンパス.

小林正史・久保田慎二・孫国平・王永磊　共著「竪穴建物の焼却と覆土での火焚き行為の理由」2016年６月４日『日本文化財科学会第33回大会研究発表要旨集』pp. 80-81、於奈良大学.

小林正史「蒸したウルチ米が主食となった理由」（主旨説明）2016年５月29日『日本考古学協会第82回総会発表要旨』pp. 120-121、東京学芸大学.

小林正史「南アジアの伝統的土器作りにおける男女の分業」2015年５月30・31日『日本文化人類学会第49回研究大会発表要旨集』、大阪国際交流センター、pp. 117.

小林正史、外山政子、濵野浩美　共著「弥生時代～古代の調理方法の東西日本間の地域差の背景」2015年５月23・24日、『日本考古学協会第81回総会研究発表要旨』、帝京大学、pp. 202-203.

小林正史、鐘ヶ江賢二、河西学　共著「断面薄片の粒子配向と復元土器の水平割口頻度からみた東北地方の縄文・弥生深鍋の紐積み方法の変化」2015年７月11・12日、『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』、東京学芸大学、pp. 2-3.

矢作健二、小林正史、篠宮正　共著「煮炊き用土器の素地の粒度組成の時間的変化：ポイント・カウンティング法による分析」2015年７月11・12日、『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』、東京学芸大学、pp. 4-5.

小林正史、鐘ヶ江賢二　共著「縄文土器の紐積み方法の復元：三内丸山遺跡の大型破片の分析」2014年７月５・６日『日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集』、奈良教育大学、pp. 68-69.

小林正史「近畿・吉備地方における弥生時代から古墳時代への炊飯方法の変化」2014年５月18日『日本考古学協会第80回総会研究発表要旨』、日本大学文理学部、pp. 40-41.

小林正史・河西学・鐘ヶ江賢二・田畑直彦・庄田慎矢・山崎頼人・高木晃　共著「断面薄片の粒子配向からみた弥生深鍋の紐積み方法：北部九州と東北地方の比較」2013年７月６・７日、『日本文化財科学会第30回大会研究発表要旨』、弘前大学、pp. 64-65.

小林正史「伝統的炊飯方法のバリエーションを生み出した要因」2013年６月８・９日『日本文化人類学会第47回研究大会発表要旨集』、慶応大学、pp. 221.

小林正史「趣旨説明：炊飯方法を復元する３つの意義」2013年５月25・26日『日本考古学協会第79回総会研究発表要旨』、駒沢大学、pp. 120-121.

Kobayashi Masashi Use-wear analysis of Pueblo Ⅳ cooking pots from the Grasshopper site Eastern Arizona. 2012年４月 The 77th Society for American Archaeology Annual Meeting, Menphis, USA.

小林正史、河西学、田畑直彦、鐘ヶ江賢一、庄田慎矢、山崎頼人、永島豊、高木晃、岡本洋　共著「縄文・弥生土器の紐積み成形における内傾／外傾の選択理由」、『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨』、2012年６月23・24日、『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨』、京都大学、pp. 100-101.

小林正史「東南アジア大陸部の伝統的土器作り技術の地域差を生み出した要因」2012年６月23・24日『日本文化人類学会第46回研究大会発表要旨集』、広島大学、pp. 97.

小林正史「縄文・弥生時代における深鍋の使い方とイロリ構造の結びつき」2012年５月26・27日『日本考古学協会第78回総会研究発表要旨』、立正大学、pp. 190-191.

小林正史「東北タイ・ラオスにおける主食のモチ米とオカズ調理の結びつき」2011年６月11・12日『日本文化人類学会第45回研究大会要旨集』、法政大学、pp. 199.

小林正史、鐘ヶ江賢一、河西学、田畑直彦、山崎頼人　共著「弥生前期・遠賀川式土器の成形方法：粘土帯外傾接合と頚部折り曲げ手法の機能的意味」2011年６月11・12日『日本文化財科学会第28回大会発表要旨』、筑波大学、pp. 124-125.

小林正史「土器使用痕研究分科会･趣旨説明」2011年５月28・29日、『日本考古学協会第77回総会研究発表要旨』、國學院大學、pp. 120-121.

小林正史・鐘ヶ江賢二・棟上俊二・上原誠一郎　共著「東南アジアの伝統的土器つくりにおけるチュア（シャモット）の役割」2010年６月26・27日『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨』関西大学、pp. 76-77.

小林正史「スス・コゲからみた西日本の弥生深鍋による調理方法」2010年５月『日本考古学協会第76回総会研究発表要旨』、国士舘大学、pp. 58-59.

小林正史・鐘ヶ江賢二・棟上俊二・上原誠一郎　共著「土器焼成温度の意味」2009年７月11・12日、『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨』、名古屋大学、pp. 70-71.

小林正史・鐘ヶ江賢二　共著「スス・コゲからみた北部九州の弥生後期～古墳初頭の深鍋による調理方法」2008年５月『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨』東海大学、pp. 60-61.

小林正史 「東北タイ・北タイの米蒸し調理：モチ米を常食とする背景とその調理特性」2008年５月『日本文化人類学会第42回研究大会研究発表要旨』、京都大学、p. 270.

小林正史・鐘ヶ江賢二　共著「東北地方の縄文晩期土器における黒色化手法と文様施文手法の結びつき」2007年６月『日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集』奈良教育大学、pp. 116-117.

小林正史・滝沢規朗・野田豊文・坂野井絵里・佐藤雅一　共著「縄文深鍋のスス・コゲからみた調理方法―胴下部コゲの形成過程を中心に―」2007年５月、『日本考古学協会第73回総会研究発表要旨』明治大学、pp. 134-135.

小林正史・鐘ヶ江賢二　共著「縄文後・晩期の黒色化手法の伝播過程」2006年６月『日本文化財科学会第23回大会研究発表要旨集』東京学芸大学、pp. 22-23.

小林正史・北野博司・島原弘征・西澤正晴・福島正和・村田淳　共著「スス・コゲからみた東北地方古代の米の調理方法：岩手県二戸市上田面遺跡を中心として」2006年５月『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』東京学芸大学、pp. 162-165.

小林正史「稲作農耕民の伝統的土器作り技術における工程間の補い合い」2005年５月『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』国士舘大学、pp. 122-125.

須原拓・米田寛・北村忠昭・小林正史・長友朋子・中村大介「黒斑からみた東北地方の縄文土器の野焼き方法」2005年５月、『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』国士舘大学、pp. 59-62.

小林正史・鐘ヶ江賢二「縄文から弥生への彩色手法の変化」2004年５月『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』千葉大学、pp. 61-64.

長友朋子・庄田慎矢・所一男・久世建二・小林正史・松尾奈緒子・中村大介・鐘ヶ江賢二・渡邊誠　共著「弥生時代における覆い型野焼きの受容と展開」2004年５月『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』千葉大学、pp. 98-101.

小林正史「バングラデシュ西部の２村間の食文化比較に基づいた食材・加工方法・調理方法・飲食方法の関連」2004年６月『日本文化人類学会第38回研究大会発表抄録』東京学国語大学、pp. 138.

小林正史・金箱文夫　共著「ナッツ類加工場から出土した縄文土鍋の使い方：赤山陣屋跡遺跡の分析」2003年５月『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』日本大学、pp. 41-44.

小林正史「ススとコゲからみた縄文土器による調理方法」2002年５月『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』東京都立大学、pp. 53-56.

小林正史「南アジアの稲作文化圏における米の加工・調理方法と食べ方の関連」2002年６月『日本民族学会第36回研究大会発表抄録』金沢大学、pp. 133.

小林正史・北野博司・久世建二　共著「東北地方の初期弥生土器の野焼き方法」2001年５月『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』駒沢大学、pp. 61-64.

小林正史「バングラデシュ・シャムタ村の食文化」、2001年５月、『日本民族学会第35回研究大会発表抄録』pp. 126.

久世建二・小島俊彰・北野博司・小林正史（文責は小林）共著「北部九州における縄文から弥生への野焼き方法の変化」、2000年５月、『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』国士舘大学、pp. 86-89.

小林正史「沖縄離島地域の天水利用」2000年５月『日本民族学会第34回研究大会発表抄録』一橋大学、pp. 20.

久世建二・小島俊彰・北野博司・小林正史・徳永哲秀（文責は小林）「弥生時代の赤塗土器の野焼き方法」1999年５月『日本考古学協会第65回総会研究発表要旨』群馬大学、pp. 85-88.

小林正史「土器の装飾スタイルの変化のプロセス」1999年５月『日本民族学会第33回研究大会発表抄録』東京都立大学、p. 60.

柳瀬昭彦・小林正史（文責は小林）共著「炭化物からみた弥生時代の煮炊き用土器の使い分け」1998年５月『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』青山学院大学、pp. 65-68.

久世建二・小島俊彰・北野博司・小林正史・柏原孝俊・石橋新次　共著「黒斑からみた甕棺の野焼き方法」1998年５月『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』青山学院大学、pp. 69-72.

小林正史「日本の初期水田稲作農耕民の米の調理方法」1997年５月『第31回日本民族学会研究大会研究発表抄録』国立民族学博物館、pp. 46.

北野博司・久世建二・小林正史・徳沢啓一・山田美和　共著「古代の土師器長胴甕の野焼き方法」1997年５月『日本考古学協会第63回総会研究発表要旨』、立正大学、pp. 107-110.

小林正史「弥生時代の甕の作り分けについて」1997年５月『日本考古学協会第63回総会研究発表要旨』立正大学、pp. 70-73.

久世建二・北野博司・小島俊彰・小林正史（文責小林）共著「縄文土器の野焼き方法」1996年５月『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨』早稲田大学、pp. 94-97.

久世建二・小林正史・橋場和彦・北野博司　共著「内面黒色土器の焼成技法」1996年５月『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨』早稲田大学、pp. 138-141.

小林正史・宮本正規　共著「熱膨張率と断面色調からみた縄文・弥生土器の焼成温度の推定」1996年６月『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨』、東京学芸大学、pp. 32-33.

小林正史「水甕の成立の背景」1995年６月『第29回日本民族学会研究大会研究発表抄録』大阪大学、pp. 126.

小林正史「土器作り民族例における野焼き技術の通文化的比較」1995年６月『第49回日本人類学会

・日本民族学会連合大会研究発表抄録』千葉大学、pp. 129.

西田泰民・宮本正規・小林正史（文責は小林）「ポイント・カウンティング法による土器胎土の砂粒含有量の分析　―土器の使い方との関連から―」1995年６月、『日本文化財科学会第12回大会研究発表要旨』立命館大学、pp. 74-75.

坂井良輔・藤田邦雄・小林正史（文責は小林）「脂質分析からみた中・近世の燈明油」1995年６月『日本文化財科学会第12回大会研究発表要旨』、立命館大学、pp. 176-177.

小林正史「プエブロ・インディアンの伝統的調理方法の変化」1994年６月『第28回日本民族学会研究大会研究発表抄録』東北大学、pp. 65.

久世建二・北野博司・金昌郁・藤井一範・姜興錫・南部次郎・小林正史（文責は小林）共著「縄文土器から弥生土器への野焼き技術の変化」1994年５月『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』東京学芸大学、pp. 26-29.

久世建二・小林正史・金昌郁・北野博司　共著「須恵器杯類の製作技法」1994年５月『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』東京学芸大学、pp. 45-48.

小林正史「稲作農耕民の調理方法についての民族考古学的分析」1993年６月『第47回日本人類学会・日本民族学会連合大会研究発表抄録』国立民族学博物館、pp. 119.

小林正史「東北地方・縄文晩期後半の単位文様施文手法」1993年５月『日本考古学協会第59回総会研究発表要旨』明治大学、pp. 38-43.

小林正史・宮本正規　共著「縄文・弥生土器の焼成温度の測定」1993年５月、『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨』、pp. 94-95.

小林正史「縄文土器から弥生土器への調理方法の変化　―民族誌資料を参考として―」1992年５月『日本考古学協会第58回総会研究発表要旨』山梨学院大学、pp. 98-101.

上農　肇先生への謝辞

食物栄養学科　新澤　祥恵

上農　肇先生は宮城教育大学をご卒業、また、上越教育大学大学院学校教育研究科障害児教育専攻を修了され、金沢市内の小学校で教鞭を執られたほか、長く、養護学校や特別支援学校で障害児教育に当たってこられました。この他、県内の小学校から大学で、児童、生徒、学生を対象に幅広くスクールカウンセラーを勤めて来られました。

本学には、2020年度に着任され、「発達心理学」「特別支援教育」「教育相談」「学校心理学」「青年の心理」「社会心理学の基礎」など食物栄養学科の教職課程を中心として心理系や特別支援系の専門科目で栄養教諭として必要な発達に関する心理的なメカニズムや特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒のニーズへの対応、生徒指導・教育相談の知識や技能をご指導いただきました。この他、「総合教養」「情報機器演習」「栄養士への道」「学びの基礎」など、幅広い分野の学科目をご担当いただき、さらに学生生活に関する様々な課題にご専門の立場で対応していただくことができました。

また、「教学マネジメント委員会教職課程運営部会」「教学・学生支援センター学生担当・特別支援担当」「学術情報研究・社会連携センター紀要担当」「アドミッションセンター広報担当」「ウォーミングアップ学習担当」と授業以外でも多くの役割をご担当下さいました。

先生は、2011年の東日本大震災の際には緊急派遣スクールカウンセラーとして宮城県石巻市に赴かれており、地元でも輪島市発達支援室相談員、かほく市いじめ問題委員会、金沢市特別支援教育委員会の委員や児童福祉施設での心理スーパーバイザー、児童養護施設支援強化事業アドバイザーなど、多くの社会活動にも関わってこられました。

著書では「発達障害のある不登校児童に対する教室復帰への支援」「特別支援学校の地域への支援」で分担執筆をしていらっしゃいます。先のご著書の中では、不登校児としての対応、発達障害への対応として、そのアセスメントや心情理解、寄り添うということ、そして、その対応として解決志向型ブリーフセラピーが有効であることを示しています。後者では、ご経験をふまえ、特別支援学校のセンター的機能を上げ、相談支援では幼稚園・保育園から小学校への修学の節目でのニーズが多いことや、情報提供の問題、また、特別支援教育コーディネータの必要性を事例により示唆しました。

論文では、先述の発達障害と不登校の問題を取り上げ、石川県スクールカウンセラーとして小学校の教育相談室で行った事例紹介として、学校への不登校から、登校はできるが教室に入れない、そして教室復帰の過程を上げ、そのアセスメントからその過程を５期に分けて各期ごとにおける適応指導が述べており、不登校に至る背景には様々な発達障害がみられることやこの問題を担当するものは教育相談のみの視点ではなく、特別支援教育など複数の視点が必要であると説いておられ、障害児教育の専門家、学校カウンセラーのベテランであることをうかがわせるものでした。

最後になりますが、上農先生には、改組となり、学科メンバーが忙しい時期に、どのようなお役目でも快く引き受けていただきましたこと、様々な学生への丁寧なご指導に感謝しております。今後もご支援をお願いしますとともに、ますますのご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

履歴・研究業績（2023. 3 現在）

氏　　名：上農　肇

所　　属：短期大学部　食物栄養学科

専門分野：教育相談・特別支援教育

研究・指導分野：ブリーフセラピー　特別なニーズのある子どもへの教育相談

担当科目

＜本学＞

総合教養ＣⅠ、総合教養ＣⅡ、情報機器演習Ａ、情報機器演習Ｂ、栄養士への道Ａ、栄養士への道Ｂ、栄養士への道Ｃ、栄養士への道Ｄ、学びの基礎、発達心理学、特別支援教育、教育相談（生徒指導法を含む）、学校心理学（学校・教育心理学）、青年の心理、社会心理学の基礎

学　歴

1979年３月　宮城教育大学教育学部　言語障害児教育教員養成課程卒業（教育学士）

1991年３月　上越教育大学大学院　学校教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（教育学修士）

職　歴

1979年４月　宮城県名取市立増田小学校教諭（～1982年３月）

1982年４月　石川県立ろう学校教諭（～1996年３月）

1988年４月　金沢大学教育学部非常勤講師（～1989年３月）・1992年４月（～1997年３月）

1996年４月　石川県金沢市立明成小学校教諭（～1997年３月）

1997年４月　金沢市教育センター研修指導主事（～1999年３月）

1999年４月　金沢市教育相談センター（2001年４月より総合相談センター）指導主事（～2003年７月）

2003年７月　金沢市教育プラザ富樫相談センター指導主事（～2004年３月）

2004年４月　金沢市立十一屋小学校教諭（～2008年３月）

2008年４月　石川県立総合養護学校（2010年４月よりいしかわ特別支援学校）教諭（～2013年３月）

2013年４月　石川県立明和特別支援学校教諭（～2017年３月）

2017年４月　金沢星稜大学学生相談室カウンセラー（～2017年６月）

2017年４月　石川県公立学校スクールカウンセラー（～2020年３月）

2018年１月　金沢学院高校スクールカウンセラー（～2018年３月）

2020年４月　北陸学院大学短期大学部食物栄養学科教授（～現在）

2022年３月　石川県公立学校スクールカウンセラー（～現在）

学会等における活動・役職歴

1982年４月　北陸地区聾教育研究会会員（～1996年３月）
1982年４月　全日本聾教育研究会会員（～1996年３月）
1986年４月　北陸地区聾教育研究会理事（～1990年３月）・1991年４月（～1994年３月）
1987年４月　全日本聾教育研究会常任理事（～1990年３月）・1992年４月（～1994年３月）
1990年４月　日本特殊教育学会会員（～2000年３月）
1991年４月　ろう教育科学会会員（～2000年３月）
1992年４月　聴覚障害誌北陸地区編集協力委員（～1993年３月）
2000年４月　日本心理臨床学会会員（～現在）
2000年４月　日本臨床心理士会会員（～現在）
2000年４月　石川県臨床心理士会会員（～現在）
2012年４月　石川県臨床心理士会倫理ワーキンググループ・広報委員長（～2015年３月）

社会貢献・活動

1994年４月　石川県心身障害児専門相談員（～1996年３月）
1997年４月　金沢市就学指導委員（～1998年３月）
2003年４月　金沢市特別支援教育指針策定検討会委員（～2004年３月）・2008年４月（～2009年３月）
2004年４月　石川県特別支援教育推進体制モデル事業（2006年より体制推進事業）専門家チーム委員（～2017年３月）
2005年４月　ジョブカフェ石川加賀サテライトカウンセラー（～2007年３月）
2005年４月　小松市教育センター専門相談員（～2009年３月）
2006年４月　子ども家庭支援センター金沢心理療法担当（～2010年３月）
2008年４月　石川県こころのケアネットワーク検討会委員（～2011年３月）
2008年４月　石川県高等学校発達障害（2009年より生徒指導・発達障害）サポートチーム委員（～2017年３月）
2011年５月　東日本大震災緊急派遣スクールカウンセラー（宮城県石巻市）
2018年４月　輪島市発達支援室相談員（～2019年３月）
2019年11月　かほく市いじめ問題調査委員会委員（～2021年３月）
2020年４月　金沢市特別支援教育委員会委員（～現在）
2020年10月　社会福祉法人享誠塾心理スーパーバイザー（～現在）
2021年６月　石川県児童養護施設支援強化事業アドバイザー（～現在）
2022年６月　金沢市特別支援教育アドバイザー（～現在）

表　彰

2004年11月　松任市（現白山市）暁烏敏賞
2006年11月　石川県優秀教員
2007年２月　文部科学省優秀教員
2010年10月　上越教育大学辰野千壽教育賞
2012年10月　中日教育賞

業　績

著作・教科書

１）「つながり」という支援～教育相談機関における電話相談の実践を振り返って～，第20回暁烏敏賞入選論文，2004　単著
２）発達障害のある不登校児童に対する教室復帰への支援，金剛出版，pp78～94，2006　共著
３）特別支援学校の地域への支援，明治図書，pp 73-78，2009　共著

研究報告書

１）小学校・中学校で学ぶ聴覚障害児童・生徒の両親に対する援助～質問紙調査結果からの考察～，聴覚障害児を持つ親への援助（平成７年度文部省助成局開発研究事業報告書），pp 41-50，1996.
２）教育相談機関における学習困難児童への実践

的取り組み，第14回聴音研シンポジューム報告書，pp33-44，2003.
3）金沢市における特別支援教育の現状と課題について～指導主事・心理士の二つの立場から～，第15回聴音研シンポジューム報告書，pp 57-59，2004.
4）「つながり」という支援～教育相談機関における電話相談の実践を振り返って～，第16回聴音研シンポジューム報告書，pp10-23，2005.
5）特別支援学校の地域支援をとおして，平成21年度日本小児神経学会北陸地方会活動報告書，pp32-35，2010.

研究論文

1）大塚明敏・上農肇：聾学校幼稚部における母親指導の一助としての語い表作成とパソコン利用による語い提示の実践についての研究，金沢大学教育学部教育工学研究12，pp163-176，1986.
2）上農肇：聴覚障害生徒の補聴器活用の自己評価に関する研究，上越教育大学大学院修士論文，1991.
3）上農肇：聴覚障害生徒の補聴器活用の自己評価，障害児教育と構成能力ブロック検査，土佐林教授退官記念論文集編集委員会，pp98-107，1991.
4）上農肇：聾学校における授業，大学院教育実習の手引き，上越教育大学，pp36-40，1991.
5）上農肇・中村健司・夷藤明：機器を利用した発音指導とその評価，聴覚障害47（7），pp 27-33，1992.
6）上農肇・高松吉道・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の補聴器活用について（1）－調査による補聴効果の評価－，ろう教育科学，34（1），pp11-31，1992.
7）上農肇・高松吉道・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の補聴器活用について（2）－検査による補聴効果の評価－，ろう教育科学，34（3），pp97-110，1992.
8）上農肇：教育相談センターにおける聴能サービスの実践－難聴児童・生徒のための教育相談の試み－，ろう教育科学，41（3），pp101-113，1999.
9）上農肇：教育相談機関における軽度発達障害を持つ子どもへの支援，上越教育大学障害児実践センター紀要第10巻，pp7-12，2004.
10）「小学校の教育相談室を活用した発達障害の疑いのある不登校児童への適応指導」，北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部『教職課程研究』第７号，pp1-5，2020.

その他

1）上農肇：本校における補聴器フィッティングの実際，石川県立ろう学校研究紀要３，pp36-43，1985.
2）上農肇：言語指導の一助としてのパソコンを利用した語い表の作成についての研究，昭和60年度石川県教職員研究奨励一般研究，1986.
3）上農肇：挿入利得を考慮したフィッティングについて，石川県立ろう学校研究紀要４，pp 25-30，1986.
4）上農肇：ろう学校における養護・訓練の実際－聴覚の活用－，昭和61年度石川県教職員研究奨励一般研究，1987.
5）上農肇・山本賢三・田野正昭・諸江修・藤井真人・田森昇二：障害児のことばに関する実践的研究，昭和63年度石川県教職員研究奨励一般研究，1989.
6）上農肇・大泉優美子・桜井康博・坪田尚子・古川道男：目立つ子と目立たない子，障害児教育における授業分析・上越教育大学障害児教育講座大野研究室，pp45-81，1990.
7）上農肇：聴覚障害生徒の補聴器活用の自己評価に関する研究，新潟県聴覚言語障害児教育研究会紀要５，pp37-39，1991.
8）石川県立ろう学校研究推進委員会：一人ひとりの可能性を伸ばすために，石川県立ろう学校，1993.
9）大慶久美子・井村八恵子・高田茂・上農肇・関貴代美・池田良治・川江美幸・西出明代・中野善成・保田美和：教科の学習において、自ら学ぶ力を育てるにはどのようにしたらよいか，平成５年度石川県教職員研究奨励一般研究，1994.
10）上農肇：「みみだより」集録，石川県立ろう学校，1994.

11）上農肇：昨年度を振り返って（訪問教育相談の開始），聴覚障害50（４），pp13，1995.
12）上農肇・夷藤明・大高政男・岩本弘子・新木章元・浅野勘六・森下富士夫・高桑俊：訪問教育相談事業について－小・中学校に在籍する聴覚障害児童・生徒への間接的援助－，石川県立ろう学校研究紀要13，pp53-56，1996.
13）岩本弘子・上農肇：小・中学校に在籍する聴覚障害児の適応状況に関する調査研究－聴覚障害児本人・保護者・教師への質問紙調査結果の分析を通して－，石川県立ろう学校研究紀要13，pp43-45，pp9-10，1996.
14）中村加久美・上農肇：「学校保健概況」の作成－心身両面の健康管理の取り組み－，石川県立ろう学校研究紀要13，pp36-38，1996.
15）田野正昭・上農肇：学習上の困難を有する児童生徒への援助の在り方に関する調査研究－中間報告書－，金沢市教育センター，1998.
16）和泉慶子・西雅子・田野正昭・冨田俊輔・織田静代・上農肇：学習上の困難を有する児童生徒への援助の在り方に関する調査研究－研究報告書－，金沢市教育センター，1999.
17）上農肇：聴覚活用相談，平成10年度教育相談研究紀要，金沢市教育センター，pp19-26，1999.
18）上農肇：教育相談事例報告（学習のつまずきを示す生徒に対して継続援助を行ったケース），平成11年度研究紀要，金沢市教育相談センター，pp12-17，2000.
19）上農肇：「集団不適応」への心理教育的援助の実践事例，平成12年度研究紀要，金沢市教育相談センター，pp40-52，2001.
20）上農肇：教育相談活動の中での小中学校への援助の位置づけ，平成13年度研究紀要，金沢市総合教育相談センター，pp1-7，2002.
21）上農肇：学校との連絡会（教育相談機関から学校への援助のあり方，平成14年度研究紀要，金沢市総合教育相談センター，pp1-11，2003.

研究発表

１）上農肇：言語指導の一助としてのパソコンを利用した語い表の活用についての実践的研究，第19回全日本聾教育研究大会研究集録，pp87-88，1985.
２）上農肇：ピクチュアディスクリプションの指導についての実践報告，第20回全日本聾教育研究大会研究集録，pp44-45，1986.
３）上農肇・高松吉道・井坂行男・我妻敏博・星名信昭：聾学校生徒の補聴器の使用状況と補聴効果との関連，日本特殊教育学会第28回大会発表論文集，pp66-67，1990.
４）高松吉道・上農肇・井坂行男・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の快適レベル・不快レベルと補聴器の周波数特性，日本特殊教育学会第28回大会発表論文集，pp64-65，1990.
５）井坂行男・上農肇・高松吉道・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害児の語彙における概念の量的特徴－動物・乗り物・道具に関する語彙について－，日本特殊教育学会第28回大会発表論文集，pp46-47，1990.
６）上農肇・高松吉道・井坂行男・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の環境音受聴テスト成績について，第24回全日本聾教育研究大会研究集録，pp126-127，1990.
７）高松吉道・上農肇・井坂行男・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の快適レベルからみた補聴器選択手順の評価，第24回全日本聾教育研究大会研究集録，pp128-129，1990.
８）井坂行男・上農肇・高松吉道・我妻敏博・星名信昭：聾学校児童・生徒の獲得語彙からみた概念のつながりについて，第24回全日本聾教育研究大会研究集録，pp172-173，1990.
９）上農肇・高松吉道・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の補聴器装用時のきこえの自己評価の特徴，日本特殊教育学会第29回大会発表論文集，pp74-75，1991.
10）上農肇・高松吉道・我妻敏博・星名信昭：聴覚障害生徒の受聴能力に関する研究（１）－補聴域値と単語了解度－，日本特殊教育学会第30回大会発表論文集，pp96-97，1992.
11）上農肇：中学部生徒のスクール・モラールについて（１），第26回全日本聾教育研究大会研究集録，pp226-227，1992.
12）上農肇・岩本弘子・佐伯英明：小・中学校に在籍する聴覚障害児の適応状況に関する調査研究－学級担任・難聴言語学級担当者への質問紙調査結果の分析－，日本特殊教育学会第

33回大会発表論文集，pp230-231，1995.
13）上農肇・夷藤明・大高政男・岩本弘子・新木章元・浅野勘六・森下富士夫・高桑俊：訪問教育相談事業について－小・中学校に在籍する聴覚障害児童・生徒への間接的援助－，第29回全日本聾教育研究大会研究集録，pp7-8，1995.
14）岩本弘子・上農肇・佐伯英明：小・中学校に在籍する聴覚障害児の適応状況に関する調査研究－聴覚障害児本人・保護者・教師への質問紙調査結果の分析を通して－，第29回全日本聾教育研究大会研究集録，pp9-10，1995.
15）中村加久美・上農肇：「学校保健概況」の作成－心身両面の健康管理の取り組み－，第29回全日本聾教育研究大会研究集録，pp229-230，1995.

講演・研修

1）2001年６月　気になる子どもの理解と問題への対応　七尾市立山王小学校教員研修
2）2003年２月　保護者との面接相談のあり方　金沢市小学校生徒指導推進協議会
3）2003年７月　子どものこころが見えますか～ことばを通したこころの子育て～　石川県難聴・言語障害児を持つ親の会
4）2003年８月　不登校問題への対応　加賀市児童生徒理解研修
5）2003年11月　保健室登校の子どもの理解と対応　石川郡・松任市学校保健会視察研修
6）2005年２月　相手との信頼関係を得るためのコツ～カウンセラーの立場から～　石川長寿大学能登中部校
7）2005年７月　こころの子育て～見逃さないで、子どもの心のシグナル～　金沢市立十一屋小学校育友会
8）2006年２月　相手との信頼関係を得るためのコツ～カウンセラーの立場から～　石川長寿大学能登北部校
9）2007年６月　「若竹」へのすこやかな成長のために　金沢市立十一屋小学校育友会
10）2007年８月　児童生徒理解～生徒指導の実践を通して～　野々市町教職員研修
11）2007年11月　発達障害　金沢こころの電話
12）2008年９月　電話相談「人がこころをみつめるとき」～きくことの大切さ～　加賀市青少年育成センター
13）2009年12月　発達障害の理解と対応について　石川県ボーイスカウト指導員研修
14）2010年７月　発達障害を持った生徒への（生徒指導の）声かけの仕方～　金沢市中学校生徒指導推進協議会
15）2011年１月　ほめる・みとめる　金沢市立浅野川中学校教職員研修
16）2011年８月・2012年８月　事件事故・災害後の児童生徒の心のケア　石川県教育センター
17）2011年８月　発達障害のある生徒の理解とかかわり方　金沢市立金石中学校教職員研修
18）2012年１月　発達障害のある子どもの理解と支援～図書館・図書室での対応の仕方～　かほく市図書館・学校図書館担当者研修
19）2012年１月・２月・３月　保育者による保護者支援・家庭支援～保育指導へのカウンセリングの援用　キッズランドいなみえん
20）2012年４月　困難を抱える人への支援～心理的支援の立場から～　金沢要約筆記サークル
21）2012年５月　図書館における支援の必要な方への接遇～発達障害のある人の理解と支援から学ぶ～　石川県立図書館職員研修
22）2012年８月　障害のある子どもの理解と支援～発達障害を中心に～　全国珠算教育連盟石川県支部
23）2012年11月　障害(がい)の基本的理解　石川県学童保育研究集会
24）2013年５月　発達障害の基本的な知識と対応について　野々市市特別支援教育支援員研修
25）2013年５月　発達障害の生徒への理解と対応　石川県高P連生徒指導委員会・母親代表委員会合同委員会研修
26）2013年５月　個別指導計画の作成と実際　金沢市保育士幼稚園教諭研修
27）2014年３月・2015年３月　移動サービスの利用者を理解する　移動サービスに認定運転者講習
28）2014年６月　教育現場で求められる「合理的配慮」について　石川県特別支援教育研究会理事研究協議会

29）2014年８月　発達障害の理解と支援について　金沢市中学校教育研究会教育相談部会
30）2015年９月　特別支援学級で取り組む「算数」の指導　金沢市小学校教育研究会特別支援教育部会
31）2016年５月　相談員の業務　石川県立特別支援学校専門相談員育成研修会
32）2016年５月　「障害者差別解消法」の施行にあたって～基本的な考え方と学校での対応について～　白山市小中学校コーディネーター研修
33）2017年12月　障害の疑われる学生への対応～基本的な理解と支援～　石川職業能力開発短期大学校
34）2018年５月　発達障害のある子どもの親への対応～基本的な理解と電話相談・支援～　石川県家庭教育電話相談員研修
35）2018年６月　思春期のこころを育むために　白山市立北星中学校PTA地区懇談会
36）2018年10月　発達障害のある子どもとのコミュニケーション　放課後子ども総合プラン研修
37）2018年10月　特別支援教育支援員の役割と課題　輪島市特別支援教育支援員研修
38）2018年11月　コミュニケーションが難しい保護者との対応～保育指導のための保護者の心理理解～　輪島市保育所主任研修
39）2019年９月　ネット・ゲーム依存の実態と対応・予防について　珠洲市青少年育成センター
40）2020年10月　悩みや困りごとを抱える人とのかかわり～心理支援の立場から～　加賀地区行政相談連絡会
41）2020年11月　対人コミュニケーション～悩みや困りごとを抱える人とのかかわり～　金沢人権擁護委員協議会
42）2021年８月　子どもとの信頼関係を築くためのコツ　珠洲市青少年育成センター
43）2022年８月　不登校生徒への相談と支援のあり方について　やすらぎ金沢教室
44）2022年９月　ネット・ゲーム依存の理解と対応について　野々市市立野々市中学校家庭教育学級
45）2022年９月　ネット・ゲーム依存の理解と対応について　野々市市立富陽学校育友会
46）2022年11月　親子で考える思春期の心と健康～ネットの使い方　珠洲市立緑丘中学校PTA成人教育研修

茶谷信一先生への謝辞

食物栄養学科　新澤　祥恵

茶谷信一先生は1978年に京都外国語大学をご卒業後、金沢市立金石町小学校など、いくつかの小学校で教鞭を執られましたが、その間、金沢市教育センター研修指導主事や、石川県教育センター指導主事などとして教員の指導にも当たってこられました。さらに、浅野川小学校、扇台小学校の教頭、そして、扇台小学校、南小立野小学校の校長を歴任されました。その後、金沢市立泉野図書館長をおつとめになられた後、2018年に北陸学院大学短期大学部食物栄養学科に着任されました。

本学では、栄養教諭免許取得のための教職課程で「教育者論」「教育方法論」「道徳・特別活動論」「教育実習指導」「教育実践演習」などを担当され、教員の役割や学校組織の在り方、教育制度や地域との連携など、教職の基本的な事柄や児童・生徒への指導法、さらに栄養教諭が行わなければならない食育について、また、教育実習へ臨むにあたっての心構えなど、先生のご経験を踏まえてご指導をしていただきました。

また、この長い児童教育や学校運営のご経験を買われ、短期大学部着任の翌年からは北陸学院小学校校長を兼任されることにもなりました。先生にとっては大変な激務であったことと思いますが、いつも笑顔で児童をつつみ込むように接しているお姿は、キリスト者としての使命をもって、児童教育にあたっていることがうかがわれるものでした。

先生は本学に着任されてからも、幼稚園や保育所、認定こども園、小学校などの教職員や保護者を対象に多くの講演会講師をされています。先生のご講演では、「肯定的な見方とことばかけ」や「長所を伸ばす」「ほめる」といった視点でのお話が多くなりますが、今、日本の子どもは外国の子ども達に比べて、自己肯定感が低いといわれており、それが課題ともなっている中で、先生の子どもの見方についてのご提案は、私達が子どもの成長を見守る上で大きな示唆を与えてくれたものと思っています。

さて、栄養士或いは栄養教諭が目指す「食育」の目的として、「生きる力」を育むということが上げられます。先生の論文でも「生きる力」を育てるや「生きる力」の育成というという視点が取り上げられています。現代社会の中で多様な課題に自分の力で解決していく能力を養うもので、これには知・徳・体のバランスがとれたものでなければならず、知識基盤社会であっても必須となる力としています。このための教師の役割や学校運営という中では様々な教育の専門家が連携しなければならないもので、オーケストラに例えて、各パートが協働して目標を達成しなければならないとし、また、このためのアクティブ・ラーニングを取り上げ、課題を見いだすことから課題解決に向けての実際の授業での流れも提案されました。

先生は手品のできる校長先生として人気があったとうかがっています。このように児童の視点に立ち、寄りそう姿勢で食物栄養学科の学生にも接していただけましたことに心より感謝しております。これからもご指導をお願いするとともに、先生がますますご健康でご活躍されますよう祈っております。

履歴・研究業績（2023. 3 現在）

氏　　名：茶谷　信一

所　　属：食物栄養学科

専門分野：教育学、学校カウンセリング

研究・指導分野：学校教育

担当科目

＜本学において＞

教育者論、教育方法論、道徳・特別活動論、教育実習指導、教育実践演習、栄養士のための計算入門

＜他大学において＞

なし

学　歴（大学入学時より記載）

1974年４月　京都外国語大学　英米語学科　入学
1978年３月　京都外国語大学　英米語学科　卒業

職　歴

1979年４月　金沢市立金石町小学校教諭（～1985年３月）
1985年４月　金沢市立南小立野小学校教諭（～1993年３月）
1993年４月　金沢市立大徳小学校教諭（～1995年３月）
1995年４月　金沢市教育センター研修指導主事（～1998年３月）
1998年４月　金沢市立米丸小学校教諭（～2001年３月）
2001年４月　石川県教育センター指導主事（～2006年３月）
2006年４月　金沢市立浅野川小学校教頭（～2008年３月）
2008年４月　金沢市立扇台小学校教頭（～2009年３月）
2009年４月　金沢市立扇台小学校校長（～2013年３月）
2013年４月　金沢市立南小立野小学校校長（～2016年３月）
2016年４月　金沢市立泉野図書館館長（～2018年３月）
2018年４月　北陸学院大学短期大学部教授（～2019年３月）
2019年４月～北陸学院大学短期大学部教授兼北陸学院小学校校長

学会等における活動・役職歴

現在所属している学会　日本学校教育相談学会
日本キリスト教教育学会

社会貢献・活動

2017年10月　人権擁護委員（法務省委嘱）（～現在）

業　績

研究論文

1）「今、求められる教師の職務、役割、資質」北陸学院大学短期大学部教職課程研究第４号
2）「特別活動と道徳」北陸学院大学短期大学部教職課程研究第４号
3）「教育課程の理念と展開の仕方」北陸学院大学短期大学部教職課程研究第５号
4）「総合的な学習の時間における指導と評価」北陸学院大学短期大学部教職課程研究第５号
5）「教育の原理」北陸学院大学短期大学部教職課程研究第５号
6）「学校教育における自己有用感の効用」北陸学院大学短期大学部教職課程研究第６号

講演

2019年

・金沢市立米丸小学校校内研修会
・天徳幼稚園保護者会
・加賀市立橋立小中学校　学校保健委員会
・金沢市小学校教育研究会教育相談部会
・川上幼稚園保護者会
・金沢市立三和小学校校内研修会
・羽咋市PTA協議会
・広岡保育所職員研修会
・能美市保育士会研修会
・七尾市認定こども園研修会
・石川県児童館職員研修会
・白山市青少年育成センター研修会

2021年

・キリスト教保育連盟北陸部会
・小松市認定こども園「だいいち」職員研修会
・金沢市立小坂小学校校内研修会
・金沢市立南小立野小学校保護者会
・北陸学院第一幼稚園保護者会
・川上幼稚園保護者会
・北陸学院扇が丘幼稚園保護者会

2022年

・金沢市立兼六中学校研修会
・北陸学院第一幼稚園保護者会
・能美市保育士会研修会
・北陸学院扇が丘幼稚園保護者会
・野々市市立押野保育園保護者会
・金沢市立南小立野小学校保護者会
・七尾市立中島保育園研修会